

# かたりべ136

豊島区立郷土資料館・ミュージアム開設準備だより

## としまのどろぶつし 〜牛鳴知編〜



かつて、東京二三区内には多くの牧場があり、明治中葉には番付が作られるほど多くの乳用牛が市中で飼育されていました。豊島区でも、巢鴨・駒込を中心に何軒もの牧場が区内各所にありました。戦前の豊島区内に牧場があったという話は、多くの人の心を捉えるようで、当館でも季節を問わずレファレンスを受けます。今回はそんな牧場にまつわる石碑をご紹介します。

南大塚一丁目の東福寺には牛乳搾取業組合巢鴨支部が一九一〇（明治四三）年に建立した疫牛供養塔（写真参照）があります。この石碑について昭和五〇年代に巢鴨親子読書会が行った聞き取りの中では、「一頭が病気にかかると感染力が強くもう殺す他なかった」ため、「こうして死んでいった牛たちの供養の為」に建てられたと語られています。現在もそうですが、当時から病気に罹った牛を食

肉として出荷することは法律で禁じられています。そのため、今より防疫の手段が少なかった頃、隔離できる広さのない都市近郊の牧場において他の牛を感染から守るためには、症状や予後に関わらず潰すより他なかったようです。

しかし、この碑は明治四三年頃に流行った特定の病疫で死んだ牛に対する供養か、明治四三年までに病疫のため処分された牛たちの供養なのかは判然としません。また、この供養塔は山門に上る階段の横にあり、移動させたことは無いそうです。所在地に直接牛が葬られたとは考えられず、かつては東福寺近辺に牧場が「団地」と称されるほど多かつたとは言えど、なぜこの場所が選ばれたのかも不明です。他にも、発起人となった組合員は何人程度いたのか、揮毫した人物や石を彫った人物は誰かなども石碑に刻まれていないため判りません。

現在では供養塔に弔いで訪れる人はおらず、時折歴史散歩などで存在を知っている人が立ち寄るくらいだそうです。動物供養に限らず、流行り病や災害での物故者追悼であっても、時代の流れの中で地域資料や文化財の成立背景について判らなくなってしまうことは少なくありません。地域に残る伝承の保存だけではなく、改めて思い起こすきっかけを提示していくのも郷土資料館の重要な役目です。本稿も、「豊島区に牛がいた」という事実を伝えるだけではなく、牛の生涯や牧場に携わった人たちのことを思い出す糸口になればと思います。

※本稿の執筆にあたっては、観光山慈眼院東福寺の皆様にご協力いただきました。この場を借りて、御礼申し上げます。

（郷土 井坂綾）

# 巾着をにぎる熊手の酉の市

池袋駅東口から明治通りを新宿方面に向かつて一〇分ほど歩くと、左手に「大鳥神社参道」の看板が見えます。一月頃、この参道入口から大鳥神社（雑司が谷三・二〇・一四）までは「酉の市」を知らせる提灯が掲げられ、一月の酉の日には大鳥神社で熊手の授与・販売が行なわれます。令和元年の酉の市について、それに携わる人々に注目しながらご紹介いたします。令和元年は二の酉であり、一月八日と二〇日が酉の日でした。

## 【酉の市のスケジュール】

酉の日は、朝八時頃から夜一二時頃まで、大鳥神社授与所では神社が熊手を授与し、大鳥神社境内の露店でも露店商が熊手を販売します。境内の露店は他にも、たこ焼き屋や射的屋などが出ていました。神楽殿では、江戸里神楽大熊社中がお囃子を奏上し、夕方六時からは奉納演芸、九時過ぎからは抽選会が催されます。奉納演芸では、周辺地域の住民などが歌や踊りといった日頃の趣味活動を発表・奉納します。

奉納演芸と抽選会が行なわれる間、支度に追われる神職たちに代わって、宮元

町会である光和会（南池袋三丁目・雑司が谷三丁目の一部を範囲とする町会）の数名が白衣を着て授与所に詰め、神社の熊手授与を行ないます。社務所にも、午後五時から近隣町会の婦人部が詰めて奉納演芸などの裏方を手伝います。

## 【酉の市の運営組織】

東京都区部の縁日では、寺社が場所を提供し、消防関係組織が防犯・防災にあたり、露店商が露店を運営するというチーム編成がよく見られます。大鳥神社の酉の市でも、消防署、消防団、そして地元の鳶組織である高田睦と江戸消防記念会第四区七番組がテントに詰め、露店商組織である川口家が縁日に出ているすべての露店を運営しています。



写真①：大鳥神社が授与する熊手（大鳥神社提供／小判は抽選景品）

このチームにはそれぞれ明確な役割分担があり、たとえば川口家が境内に出店

する露店の「小屋掛け」は自分たちで行なうことはせず、必ず第四区七番組に依頼します。それは第四区七番組の鳶たちが大鳥神社においては専門の仕事師（組み立て作業の専門家）だからです。

縁日に来た子供たちには、川口家・婦人部・高田睦・第四区七番組の奉納したお菓子が夕方から無料配布されました。

## 【神社の熊手と抽選会】

大鳥神社の熊手（写真①）は一〇〇〇円で受けることができます。この熊手の特徴は神紋にちなんだ福包みがついていることです。福包みは陰陽五行にあわせて五色あり、年により色を変えています。令和元年は青色でした。また、熊手には一枚の抽選券がつきます。抽選会では神社総代や宮司の手によって籤が引かれ、その景品として、各日、純金小判一枚と純銀小判四〇枚が用意されました。

## 【川口家の熊手】

大鳥神社境内で熊手を販売している露店は神輿庫前の一か所ですが、よく見てみると露店は四つに分割され、それぞれで特徴的な熊手を取り揃えています（写真②）。向かって右から、良いものをすくい悪いものを流すザルの熊手、江戸時代流行した形状の熊手、縁起物として松を



写真②：川口家の熊手販売（令和元年 11月8日 16:22 撮影）

あしらった熊手をそれぞれの目玉商品として販売しており、好みの熊手を選ぶことができます。四分割された露店は、それぞれ製造・販売者が異なります。

購入した熊手は神社本殿へ向け、川口家の声で手締めを行ないます。露店や奉納演芸をのぞきにやっけて来た人たちも一緒に手打ちします。露店に並んだきらびやかな熊手を見上げ、景気よく手締めを行なうだけでも、年の瀬の風情が感じられるものです。ちなみに、露店の熊手には値札がついていません。定価での売買とは違った、売り手と買い手がその場で値を決める縁起物のやりとりこそ、酉の市の醍醐味です。

（郷土 鄧君龍）

# 作品を見る読む 19 麻生三郎《女》

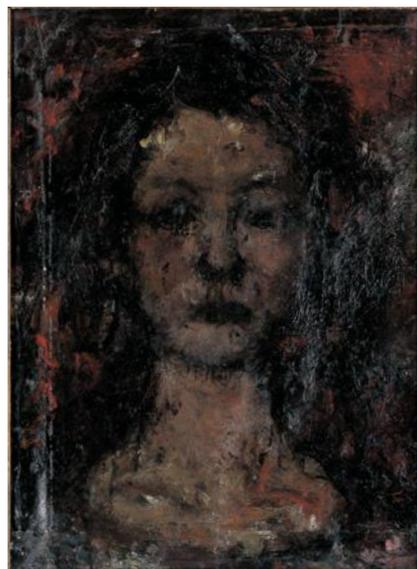


図1 麻生三郎 女 1951年  
44.1×31.9cm 豊島区蔵 (修復前)

品依頼を受け、これを好機に画面の洗浄を主な目的として修復をすることにしました。

この作品は、一九五一年(昭和二六)年の自由美術家協会第一五回展の出品作です。額の裏には同展への出品であることを示す

どちらが先かはわかりませんが、二度の大きさの変更を経て、今の状態になっているのです。

麻生三郎(一九一三—二〇〇〇)は、東京に生まれ太平洋美術学校に学び、滞欧、応召を挟みながら豊島区長崎に一九三九年から一九四八年まで在任していた画家です。一九三〇年代後半から区内に多くの芸術家が集い制作をした「池袋モンパルナス」の中心人物の一人です。画風を変えながらも、現実をどう表現するかに向き合い続けた麻生は、戦時期の体験を内に抱えながら、一九五〇年代に家族を多く題材にしていました。そのうちの一枚です。

修復家の方と一緒に作品を確認していると、様々なことが見えてきます。日頃から、作品をよく見ることは私たちの基本とするところながら、見過ごしていたことに気づかせてくれることが多いのが、修復家との作業です。額縁について、麻生は「自分で作る。チョット塗る。」と語っています。額に塗られた絵具が剥がれ落ちている場所からは、金色の層も見ることができ、手作りであろう額に入っていることとあわせて、画面にある凹凸がより一層、麻生の手の存在を強く伝えてくれます。その意味で、見るこ

まつすぐこちらに向けられた視線が印象的なこの作品(図1)は、画家の妻を描いたものです。背景は赤を基調にしながらも多くの色が重ねられていて、人物表現とあわせ、画面全体は複雑な描写がなされているといえるでしょう。次に気がつくのは、赤黒く沈んだ画面に散見される凹凸、筋状の跡ではないでしょうか。画面が波打ち、歪んでいるのです。

本作を豊島区で収蔵したのは二〇一三(平成二五)年で、この画面の歪みゆえに、あまり状態の良くない作品だと考えていました。表面には汚れが付着しているところがあるものの、展示の機会を持たないまま現在に至っています。しかし、本作は今夏予定されている展覧会\*への出



上: 図2 円内に釘穴があり、筋跡も見られる  
左: 図3 額裏のカンヴァス折込とシール

の深さを再考させてくれる作品となりました。修復研究所21の渡邊郁夫氏に多くのご教示をいただきました。記して御礼を申し上げます。

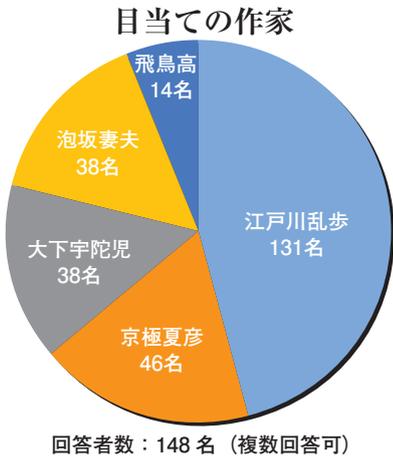
\* 本作は、世田谷美術館での麻生三郎展に出品予定でした。しかし五月末現在、次年度以降の開催に延期されたそうです。同時代の多くの作品と並べられたとき、本作がどのように見えるのか楽しみでしたが、後日を期したいと思います。

(美術 小林未央子)

# 文学・マンガ分野 企画展報告 暗がりから池袋を覗く〜ミステリ作家が見た風景〜

昨夏開催した企画展「暗がりから池袋を覗く」では、区ゆかりのミステリ作家・江戸川乱歩、大下宇陀児、飛鳥高、泡坂妻夫の四人のエッセイと、雑司ヶ谷を舞台にした京極夏彦の『姑獲鳥の夏』を取り上げ、池袋界隈のまちの風景の移り変わりを紹介しました。

文学・マンガ分野の企画展としては初めて、区ゆかりのミステリ作家を大々的に取り上げた展示でしたが、酷暑厳しい時期の開催にも関わらず、五〇〇〇人以上の方にご来場いただきました。会場で実施したアンケートでは、多くの方が乱歩の資料を目当てにご来場いただいたとの回答をいただき、根強い人気が見える結果となりました。それと同時に、自由



記述欄では「乱歩以外にも豊島区にゆかりのあるミステリ作家がいることは知らなかった」「宇陀児のアルバムが印象に残った」「作品を読んでみたいと思った」という回答も多く見られ、区ゆかりのミステリ作家を知ってもらおうひとつのきっかけにもなったようです。

\*\*\*

このたび、文学・マンガ分野では、企画展の報告として豊島区立郷土資料館の研究紀要『生活と文化』二九号（二〇二〇年三月発行）に「大下宇陀児アルバム」の資料調査を掲載しました。

このアルバムは、当時の雑司ヶ谷五丁目町の町会長であった宇陀児の戦中から戦後にかけての写真が貼られ、当時のことを思い出しながら書いたと思われる文章が添えられています。

終戦後の「昭和二十一年早春」と書かれた頁では、スーツにネクタイ姿の宇陀児の写真とともに、探偵小説を書くことへの複雑な心境が綴られています。戦後、乱歩が先頭となり、多くの探偵小説家が

作品を書き始めるなか、宇陀児はまだ執筆する気にはなれず「ほかの人達が書くのを眺めて」いたと書いています。戦禍がまた生々しく残っている「いま一番必要な小説は探偵小説ではなくて、もっと人々のための憩いとなるもの、励みとなるもの、またはいつしよになって泣くものでなくてはならぬ」と続けています。

後に書いたエッセイ「十年を顧みて」「宝石」一九五五年五月）のなかでは、終戦直後に「人殺し」の話を書くのはいやだった、とも述べており、戦後探偵小説が急速に再興してゆくことへの複雑な心境が窺えます。

戦争という大きな災禍を乗り越え、復興してゆく街や人々を見つめながら、しかし、まったく元のとおりには戻らないものがあることに、宇陀児は気づいたのかもしれない。多くの人が亡くなった戦争のあとに、たとえ物語の中とはいえ、人の命が奪われる場面を書くことへの罪悪感が、この文章に表われています。宇陀児は、小説の持つ「力」を信じていたからこそ、戦争で傷ついた人々にとって「いま一番必要な小説」は、「人殺し」の

登場しない、読む人の心に寄り添い「憩いとなるもの、励みとなるもの、またはいつしよになって泣くもの」だと考えたのではないのでしょうか。

\*\*\*

この報告が掲載されている『生活と文化』二九号は、企画展図録・グッズとともに豊島区立郷土資料館にて販売しております。詳細はホームページをご確認ください。



（左から）手ぬぐい、図録、缶バッジ

（文学・マンガ 佐伯百々子）

# セピア色の記憶

## 第35回 「大炊介坂」と「妙義坂」、そして…

左に示した二枚の写真は、ほぼ同じ地点から撮影した一九六七年九月と現在（二〇二〇年五月撮影）の本郷通り霜降橋（豊島区駒込二・三丁目と北区西ヶ原一丁目が接する区境）付近の様子です。写真手前が王子方面、奥が駒込・本郷方面になります。地図に示した\*印は撮影地点を、↓印は撮影方向を示しています。



り今は存在しない第一銀行（一九七一年に第一勧業銀行となり現在はみずほ銀行に承継）の看板などが目につきます。ただし、ここで注目するのは地形、傾斜すなわち今流行りの「坂道」です。

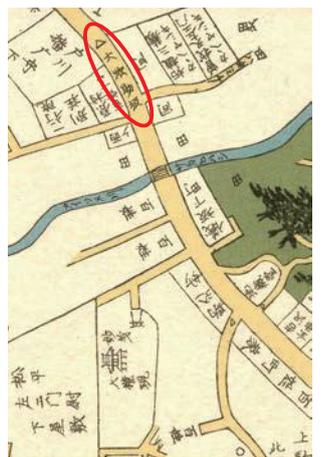


（谷田川・谷戸川）が流れ、そこに架かっていた橋が「霜降橋」。のちに都市化が進む過程で川が暗渠となり、「霜降橋」の名は交差点名として残り、暗渠上の公道の両側には染井銀座・霜降銀座・田端銀座等の商店街が形成されました。

さて、下に示した嘉永五（一八五二）年刊行「巢鴨・染井・王子辺図」（部分）で、左上から右下に伸びる道は日光御成道（岩槻街道）と呼ばれ、現在の本郷通りに該当します。手前が駒込・本郷方面、奥が王子方面という位置関係です。この街道と川の交差部分には橋の絵とともに「サカヒバシ」、左側には「アイソメ川」と記載されています。すなわち、一九世



紀半ばの江戸の人々は、この川を「藍染川」、街道に架かる橋を「境橋」と認識していたこととなります。



さらに、日光御成道の王子側から川までの下り坂部分には「大炊助坂」（現在は大炊介坂と表記）、川を越した上り坂の町並みには「駒込妙義坂下町」という書き込みが確認できます。霜降橋から駒込方面の坂道は今も妙義坂と呼ばれ、これは絵図中央下部に位置する「妙義大権現」（妙義神社）に由来するものです。妙義神社は白雉二（六五二）年創建で、一五世紀に活躍した武将太田道灌が文明三（一四七二）年に戦勝祈願をしたとされる豊島区最古の神社でもあります。

今回の豊島区と北区の区境に関わる大炊助（介）坂と妙義坂という二つの坂道のお話、仮に今風のアイドルグループ名として当てはめると「大炊介坂46」妙義坂46」となりますが、いかがでしょうか？

（郷土 秋山伸二）

## 2020年度豊島区立郷土資料館・ミュージアム開設準備グループ事業予定 (2020年4月～2021年3月)

※新型コロナウイルス感染防止対策のため、3月2日(月)から5月31日(日)まで臨時休館しました。  
 ※今後の感染防止対策や都合により、事業の中止あるいは事業内容や日程を変更する場合があります。  
 ※詳細は『広報としま』、区HPや当館HP、ミュージアム開設準備グループHPで随時お知らせいたします。

企画展	豊島区ミュージアム開設イベント第13弾 「池袋への道-近世の歴史資料、池袋モンパルナス、森山大道」	1月23日(土)～2月28日(日)
収蔵資料展	「豊島区を走る都電」	10月2日(金)～1月10日(日)
展示 見どころ解説	常設展示等の見どころを、学芸員がわかりやすく解説します。 ※事前申し込み不要 直接会場へ ※4月・5月は中止	6月27日、7月25日、8月22日、10月24日、 11月28日、12月26日、1月23日、2月27日 各回14時～40分程度
庁舎まるごと ミュージアム (3階展示)	美術分野 ①小熊秀雄の見た池袋—立教学院を中心に— ②池袋への道 展覧会のご案内(仮題)	① 2月27日(木)～9月30日(水) ②10月1日(木)～3月16日(火)
	郷土資料分野 ①エドモン・ロスタン作「シラノ・ド・ベルジュラック」展示紹介 ②豊島区を走る都電(仮題) ③未定	① 6月2日(火)～9月30日(水) ②10月1日(木)～1月8日(金) ③ 1月8日(金)～5月31日(月)
	文学・マンガ分野 ※常設展示コーナーもあります。 ①乱歩と豊島区 ②未定 ③未定	① 3月5日(木)～9月30日(水) ②10月1日(木)～2月1日(月) ③ 2月2日(火)～6月30日(水)
	第15回池袋モンパルナス回遊美術館関連事業(講演会) 企画展関連事業 トーク(森山大道氏)／ライブ／ギャラリートーク(いずれも予定)	5月 ※中止 企画展会期中開催予定
講座・講演・ 見学会など	収蔵資料展関連事業「荒川車庫見学会」(予定)	10月予定
	収蔵資料展関連講座「豊島区を走る都電」(仮題)	12月予定
	豊島区ミュージアム開設イベント第12弾 「豊島ミュージアム講座」(全4回)	10月～11月予定
刊行物	郷土資料館・ミュージアム開設準備だより 「かたりべ」136号～139号	年4回、2,200部、無料頒布 6月・9月・12月・3月刊行予定
	研究紀要「生活と文化」第30号(付・2019年度年報)	3月刊行予定 500部 有償頒布
	企画展図録	1月刊行予定 1,500部 有償頒布
臨時休館・年末 年始の休館	①収蔵資料展の開催に伴う休館 ②企画展の開催に伴う休館 ③収蔵庫移転作業に伴う休館	① 9月20日(日)～10月1日(木) ② 1月12日(火)～1月22日(金) ③ 3月1日(月)～8月2日(月)予定

### 研究紀要『生活と文化』第29号 付・2018年度年報 価格1,000円 2020年3月発行

※郷土資料館事務所(としま産業振興プラザ7階)・行政情報コーナー(区役所4階)にて頒布

「開港初期における外国人の遊歩と江戸北郊地域」

「戦前戦中期の目白・南長崎の暮らし—玉蟲和子氏聞き取り調査報告—」

「学童集団疎開(九) 再疎開期の諸問題」

「文学・マンガ分野企画展関連報告」

大下宇陀児アルバムから見る戦時下の生活について」

「彫刻家・長谷川義起」

「相撲彫刻」に込めた立体芸術の構造美と生命の表現」

及川将基

井坂 綾、岩崎 茜

青木哲夫

西方ゆり恵、佐伯百々子

松本記代



かたりべ

No.136



2020年6月26日

豊島区立郷土資料館

東京都豊島区西池袋2-37-4

としま産業振興プラザ7階

電話 03-3980-2351

URL

<http://www.city.toshima.lg.jp/bunka/bunka/shiryokan/index.html>

「かたりべ」一三六号をお届けします。春先から、新型コロナウイルス感染の報道が続く、不安と緊張の日々が続いています。四月の緊急事態宣言を受けて、当館では五月末まで臨時休館とし、講座等のイベントを延期・中止とさせていただきます。その間、職員は時差出勤やテレワーク(在宅勤務)をしながら、再開に向けて準備を進めてきました。当館では、六月二日の再開後も、引き続き密閉・密集・密接の「三密」を避けた感染防止策を講じながら、展示や事業を検討、実施してまいります。ご来館の皆様には、安心してご利用いただくため、マスクの着用や手指の消毒、間隔をあけての見学などをお願いすることとなりますが、ご協力のほどよろしくお願いいたします。なお、「かたりべ」は今年度から六頁立てとなりました。調査研究や展示の紹介など、より一層充実した誌面作りを努め、情報発信してまいります。引き続き「愛読のほどお願いいたします。(郷土 横山恵美)

### 編集後記

資料寄贈受入れの一時休止のお知らせ  
 収蔵資料移転及び準備作業のため資料寄贈の受け入れを二〇二一年夏頃まで、一時休止いたします。